

分担研究報告書

油症患者における手掌紅斑の検証

研究分担者 三苫千景 九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センター 准教授
研究協力者 貝沼茂三郎 九州大学大学院医学研究院地域医療教育ユニット 准教授
研究協力者 宮崎昭行 医療法人 山内診療所 診療所長

研究要旨 手掌紅斑は末梢血管拡張を反映し、慢性肝疾患などの全身疾患患者にみられる皮膚所見である。近年、油症検診において、多くの油症患者に手掌紅斑がみられることに気付いた。そこで、平成 30 年度福岡県油症検診受検者の手掌紅斑の有症率を検証した。

A . 研究目的

油症発生当初、多くの患者の顔面、耳前部、外陰部にざ瘡様皮疹、黒色面皰や色素沈着がみられた。発生から約 50 年が経過し、これらの皮膚症状は軽減している。検診時の皮膚診察において両手掌が紅く腫脹した方をみる機会が多い。手掌紅斑は、皮膚の血管拡張を反映した所見で、手掌の母指球、小指球や手指の基部に小紅斑が集簇し融合する。皮膚温は高く、毛細血管と細小動脈の拡張、増加を反映している。慢性肝疾患患者の 77.2%にみられ¹⁾、エストロゲン不活化障害やアンドロゲンの関与が推測される。しかし、肝疾患以外の全身疾患患者にもみられるため、他の要因の関与も考えられている。

手掌紅斑は血流障害により生じる、東洋医学的にいう“お血”スコアの一つでもある。油症患者において駆お血剤の一つ、桂枝茯苓丸は全身症状、皮膚症状、呼吸器症状を改善しており²⁾、ダイオキシン類曝露が“お血”状態を生じるのに寄与しているかもしれない。そこで、まず手掌紅斑の有症率を把握すべく、平成 30 年度福岡県油症検診において、手掌紅斑の有症率を検証した。

B . 研究方法

平成 30 年度福岡県油症検診を受けた

163 名[認定者 143 名(男性 68 名、女性 75 名)、未認定者 19 名(男性 4 名、女性 15 名)]を対象にした。一眼レフカメラ(NIKON D5600)を用いて、黒布上で両手掌を撮影した。手掌紅斑の有無は、複数の小紅斑が手掌、手指腹部全体に及ぶ場合を“あり”、母指球、小指球や手指基部に限局する場合を“部分的にあり”、ない場合を“なし”と 3 段階で写真画像により判定した。

(倫理面への配慮)

本研究は、カネミ油症の実態調査(許可番号 30-70)の研究の一つで、九州大学医系地区部局臨床研究倫理審査委員会の承認を得て行った。

C . 研究結果

認定者の年齢(中央値、最小 最大値、標準偏差)は、男性(66、42-89、12.09)、女性(68、48-86、10.5)だった。未認定者の年齢の最小、最大値は、男性は 4 名で 48-65 歳、女性は 15 名で 23-71 歳だった。

直近の血液中

2,3,4,7,8-pentachlorodibenzo-p-dioxin (PeCDF) 濃度[中央値(標準偏差)、最低最高]は、認定者男性(68 名)で 15.4975(80.4326) pg/g lipid、2.646 478.914 で、認定者女性(73 名)、41.355

(228.016) pg/g lipid、3.512 1150.607 だった。手掌紅斑の有症率は表 1 に示す。手掌紅斑“あり”は、認定者 143 名中 93 名(65.0%、男性 55 名、女性 38 名)にみられ、そのうち女性 2 名が非常に強い紅斑、女性 5 名に強い紅斑がみられた。“部分的にあり”は認定者 30 名(21.0%、男性 7 名、女性 23 名)“なし”は 20 名(14.0%、男性 6 名、女性 14 名)だった。認定者の 86.0%に手掌全体もしくは部分的に紅斑がみられ、中でも男性では 68 名中 62 名(91.2%)と高率にみられ、女性では、75 名中 61 名(81.3%)にみられた。未認定者の対象者は 19 名で、“あり”が 9 名(47.4%、男性 2 名、女性 7 名)“部分的にあり”が 8 名(42.1%、男性 1 名、女性 7 名)“なし”が 2 名(10.5%、男性 1 名、女性 1 名)だった。

D . 考察

手掌紅斑は認定患者の 86.0%に部分的、もしくは手掌全体にみられた。中でも、男性の有症率が高かった。今回の研究は対照群の人数が少なく、性別、年齢などで補正していないため、解釈に注意を要する。今後、血液中ダイオキシン類濃度との相関、サーモグラフィーによる皮膚表面温度との関連について解析する予定である。

E . 結論

油症患者において、手掌紅斑の高い有症率が確認された。

F . 引用文献

- 1) 北村啓次郎、他.肝疾患の皮膚病変
自験肝疾患患者 73 例にみられた皮膚病変とその頻度について. 皮膚臨床 31: 15-21, 1989.
- 2) Mitoma C, et al. Current state of yusho and prospects for therapeutic strategies. *Environ Sci Pollut Res Int* 2018; 25(17): 16472-80.

研究発表

- 1 . 論文発表
なし
- 2 . 学会発表
なし

G . 知的財産権の出願・登録状況 該当なし